

ことを研究したいが、最近の研究はどこまで進んでいるのかと聞かれて、いつも困却しております。そのことから、みんなで手分けして、テーマ別の「国語学研究文献総索引」というようなものが作れないものかと考えています。現在、国立国語研究所の人たち、NHK総合放送文化研究所の人たちとも相談して、コンピュータの力を借りて便利なものを作りたいと念願しておりますが、これは短時間でできるものではなく、また、広く会員のかた、あるいは会員以外の皆さまのお力をも借りるようになると思います。ことしはそれに着手しようというわけですが、いよいよはじまりましたら、よろしくお願いいたします。

終りにあたり、このような盛んな集まりが開けるようになりましたことについて、後援してくださった外務省国際交流基金の各位、開催に便宜をお計りくださった東京学芸大学の皆さんに慎んで御礼申し上げます。

これは四十周年大会を開いたときの発表要旨にそえた文と、開会の辞に述べたことをつきまぜたものである。この際「外から見た日本語、内から見た日本語」の序に変えた。

昭和六十年一月十五日

代表理事 金田一春彦

目次

序に変えて……………	金田一春彦……………3
《講演》	
日本語の将来……………	S・E・マーティン……………9
日本人の日本語……………	阪倉篤義……………47
日本語には特色などない……………	W・A・グロータース……………81
《座談会》	
外から見た日本語、内から見た日本語	
………宋文軍・D・A・ラジャカルナ・柳尚熙・(司会)金田一春彦……………	105
付記……………	205

になるようにお祈り致します。

一、今までの日本語、これからの日本語

さて、今日の話の題目は、国語学会の将来ではございません。国語そのものの将来について、申し上げることになっております。わたくしは別に、預言者の資格も、評論家の資格も持っておりません。ただ、何十年も勉強してきた学習者の一人の外国人の目から見た、日本語の現在の状態、将来の可能性の二、三点について少々お話ししたいのでございます。

はじめに申し上げたいことは、わたくしが日本語を愛しているということでございます。日本語の全部に、深い愛情・深い興味を持っております。昔の書類の中に文字だけが残っている大昔の言葉をはじめ、今、一般的に使われている言葉も、それから、地方の人の口からしか調べられない方言の言葉も含めての、日本語の全部を、できるだけ、自分の探求範囲の中に入れてたいと思います。

清濁音まで分けて、その時代の音節を正確に記そうとした、八世紀の記紀歌謡の日本語を、わたくしは愛しているし、濁音を無視しても、真面目に音節を表記する平安時代の仮名文学の日本語も愛しております。十六世紀のポルトガル人の宣教師達がこしらえてくれた、ローマ字

で発音通りに活字に出来た『平家物語』の日本語も愛しております。実は、煩わしいものではないのに、漢字・漢語だらけの明治以後の和文にも愛情を持っております。今日の日本語は、昔の国語と違っていると同じように、明日の日本語は、今日のと相違が多くあるに違いありません。狭い島国に閉ざされて、長い歴史を作って来た今までの日本語の姿は、これからどういう道をたどって、将来の世界的な役割を果たせるようになるのでしょうか。

二、国語を変化させるはずの大きな社会発展の主な傾向の三つ

1、マスコミによる大衆教育の広がり

2、技術革新の進歩

3、社会の国際化

国語に変化を進めて、その変化の格好をつけるはずのものに、日本社会に主な傾向が三つあると思います。その一つは、マスコミによる大衆教育の広がり、もう一つは、技術革新の著しい進歩、それから、社会の国際化への必然を認識して来ていることの三つなのであります。

現在の日本では、知識の普及と技術の発展は非常に印象的で、それが日本国民の高い素質の証拠となるのは確かでございます。この二つの現象は、国語にも相当の影響を与えていると思